

国語学界展望の計画と反省

平 山 輝 男

1 二年間の展望にしたこと

従来「国語学」では毎年一回の学界展望をしてきたのであったが、そのつど一冊全部のスペースを展望に当てることは、学術誌としても国語学会の機関誌としても、もったいないという声、会員の一部からも委員の中からも聞えたので、編集委員会では、これについて検討することになった。その結果、一年ごとの展望をやめて、二年間分をまとめて、展望することにした。もちろんこれはテストケースとして実施したまでである。

2 各研究分野の区分を細かにしたこと

従来の展望では、区分が粗かったが、そのために、ある分野におけるある部分についての研究活動の動きが漏れてしまっておそれがあった。この欠点を補うために、区分はかなり細かにした。たとえば、国語教育の項で大学・高校を加え、従来見のがされていたこの面の教育活動を紹介したり、文字の項を独立させて扱ったりしたことなど、その他……。

3 文献羅列をさけたこと

従来の展望では、文献を羅列してその解説に終ってしまふものもかなりあった。これも決して無価値ではないが、そのためにその分野における学界活動の動向を把握できないという難点もあった。本号では、その難点を避けてできるだけ学界活動の動向を記述することに重点をおくことにした。そして、はじめの案では、編集委員会へ寄贈された文献のみを資料とすることであったが、これは集まりが悪くて最後に各執筆者に集めてもらった。

4 各執筆者の顔ぶれを変えたこと

本号では、各分野の執筆者をなるべく従来と変えて、マンネリズムの雰囲気陥らないように試みた。

いま、ここにこの展望号を編集して反省すると、次のような得失が考えられる。

まず「失」については次のような点が指摘される。

1の項については、日進月歩の学界の動向を知るのに、二年後では遅すぎはしないか。これは読者の側に立って、執筆者の資料蒐集の困難を増すことから。

2については、各執筆者に平均十七枚というペースでは、いくら学界の大きな動向把握に重点をおくといっても、少なすぎはしないか。それだけ執筆者が苦心されたことを思っていたいへん恐縮である。

3については、適切なことと考えるが、事実はその趣旨が必ずしも各執筆者に徹底していなくて、原稿に不統一のうらみがある。しかも、再度書き直してもらうことは、時期的にも、時間的にも、できなかった。これについては、今後の展望号では、メ切的時期などを考慮することによって適当な手段があらう。

以上のような難点に対して「得」と考えられることを指摘しよう。

1については、一冊分よけいに論文を発表し得たことはいうまでもなく得とするところであるが、もっと大きな利点は、学界における論争が一年以上にまたがることはかなり多い。それらの大部分を把握して記述してもらえたことは、読者にとってはたいへん便利であらう。

2・3・4についても、その趣旨が徹底すれば、「得する」ところが多いであらう。

その期間に発表された文献を羅列することも、ある面からは必要であるが、それは他の方法によって、文献名の一覧表を作ることができよう。要はスペースも節約したいし、学界の動向も報告したいという結果の所産である。会員諸氏にもいろいろ御意見があらうと思われるので、一応われわれ編集委員のつたいきさつを述べておく次第である。この四十九集が展望号のテストケースとしていろいろ批判されることを期待する。なお、学年末（二月末メ切）の公私多忙な折に、この集の原稿のためにたいへん犠牲を払われた執筆者諸氏に厚く御礼申しあげる。